



Title	同時代の中国・中国語を学び教える闘い : 1930、40年代大阪外国語学校の中国語教育を中心に
Author(s)	宋, 新亜
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 233-246
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95089
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

同時代の中国・中国語を学び教える闘い —1930、40 年代大阪外国語学校の中国語教育を中心に—

On the Reforms of Chinese Language Acquisition in Pre-War Japan: A Case Study of Contemporary Chinese Language Education of Osaka Foreign Language School in the 1930s and 1940s

宋 新亜*
SONG Xinya

Abstract

This essay focuses on the contemporary Chinese language education reforms carried out by the Osaka Foreign Language School in the 1930s-40s. There were two major characteristics of contemporary Chinese language education in Japan before the world war II. First, contemporary Chinese language was regarded as a practical foreign language that served in commercial and military uses, because it would not help modern cultural education (*Kindai Kyouyou*). Secondly, modern Chinese was taught in *Kundoku* method. This approach not only obscured the Chinese grammatical structure, but also made lost the possibility of understanding contemporary China.

In response to the problem, the members in Osaka Foreign Language School excluded the *Kundoku* method in contemporary Chinese language education and employed the Chinese pronunciation to teach contemporary Chinese language. Textbooks consisted of works by modern Chinese writers such as Lu Xun to help students understand the culture of contemporary China. On the other hand, teachers were actively engaged in modern Chinese language research by translating overseas research studies. Through the interaction of teaching and researching, the contemporary Chinese language teaching method was reformed, thereby establishing the foundation for understanding contemporary China.

Keywords: Chinese language education, Osaka Foreign Language School, Contemporary China, Pre-war

I 「華語＝同時代の中国」

1950 年 5 月、大阪外国語学校（以下は大阪外語と略す）中国語部の初代主任教授の井上翠（1875–1957）は同校の中国研究会のインタビューを受け、自らの 70 余年の人生を振り返っており、それはのちに『松涛自述』にまとめられている。そこでは、近代日本の中国語教育の当事者である井上が、自身の中国語学習歴、北京での在住体験、中国人との交遊などを追懐し、明治大正期日本の中国語教育の様子を語っており、最後に井上は 1945 年の日本敗戦後に『井上華語大辞典』（未出版）に書いた序文を引用し、その回想に終止符を打っている。

今次戦役中（日中戦争：引用者注）、政府の一要人あり、宣言して曰く、大東亜戦争は支那に始まり支那に終わると。予をして之を言はしむれば、大東亜戦争は華語を軽視せるより始まり、遂に悲惨極まる結末に終りしものなりと。今にしてなほ覚醒せざれば、東亜和平の実

* 大阪大学大学院言語文化研究科・博士後期課程、日本学術振興会特別研究員（DC2）

現は永久望むはず⁽¹⁾。(下線部は引用者による、旧漢字は常用漢字に改めた。以下同じ)

井上が敢えて「支那」という言葉を「華語」に置き換えていることは、単なる言葉遣いの問題ではない。近代日本の中国語教育史の研究者である六角恒広が、明治以降のいわゆる「清語」、「漢語」、「支那語」、「華語」などの呼び方の変化は、「それぞれの時期の中国観を背景としているのであろう」⁽²⁾と指摘したように、井上は言葉の書き換えによって、「華語＝同時代の中国」という思考様式を提示していた。彼は1945年、日本が敗戦したばかりの時点で、明治以来の中国語教育を反省し、同時代の中国への蔑視を批判しているのではないだろうか。そこで、日中戦争の罪の根源は、「華語を軽視する」こと、つまり同時代の中国を蔑視することにあると指摘していた。その認識を改めなければ、戦争の惨禍を避けることはできず、永久の和平を期待することは不可能と井上はさらに忠告した。

この序文が書かれた半年後の1946年、井上はこれに加筆し、「鵬翼を題す」と題し、戦時中の資源統制によって停刊され、戦後に復活した、中国語部の同窓会雑誌『鵬翼』復刊巻に寄稿した。井上は同窓会雑誌という場を借り、改めて中国語部の同窓生や学生に、中国語を重視し、同時代の中国に目を向けようと呼びかけていた⁽³⁾。

『鵬翼』復刊巻の編集を担当していたのは、当時の中国語部の学生である。彼らは同号の「編輯後記」において、復刊の動機について、「私達青年の求めて止まないもの——それは実に熱情である。中国語部精神から発するところ烈しい熱情である。私達は中国と恋愛した。「鵬翼」は私達中国語部の真の恋人であり、真の妻であるところの全性格を表現しているものである」⁽⁴⁾と語った。中国語ではなく、中国と恋愛した。編集者が書いたこの「熱情」は、実は中国語部の学生が求めていることは、もっぱら中国語を学ぶことだけではなく、中国語を支える同時代の中国の文化、風習、思想などを理解するということであろう。ここで、井上の志を継いだ学生たちの「熱情」は、実は井上が考えた「華語＝同時代の中国」という認識を共有するものではないだろうか。しかしながら、「華語＝同時代の中国」は、なぜ、敗戦直後という時点で、井上によって繰り返し言及されているのか。そして、井上が教鞭を執っていた大阪外語では、いったいどのような中国語教育を行い、「華語＝同時代の中国」という認識はいったいどのように戦前の中国語教育現場で機能したのか。これらの問題点を解明するために、1930年代から1940年代までの大阪外語の中国語教育の実態を関する必要がある。

近代日本の中国語教育に関する研究の土台を築いたのは、六角恒広、安藤彦太郎らの研究であると考えられる。なかでも、六角恒広は長年にわたって、中国語教育史の研究に尽力し、その研究の対象、方法を提示したうえで、明治以来の中国語教育の全体像を描き出している⁽⁵⁾。本稿が注目する大阪外語の中国語教育を取り扱う先行研究として、大阪外国語大学が編纂した『大阪外国語大学70年史』⁽⁶⁾および邵艶の大阪外語と天理外国語学校の中国語教育研究⁽⁷⁾が挙げられる。いずれも大阪外語の中国語部の創設以来の歴史を整理するものであり、本稿の関心である大阪外語中国語部の教員たちの具体的な教育活動とは異なっているが、本稿に貴重な資料群を提供してくれている。また、戦前の東京外国語大学（以下、東京外語と略す）、東亜同文書院、大東文化学院など教育機構での中国語教育の実態は、藤田佳久、Paul Sinclair、Dongyan Blachfordなど研究者によっても明らかにされている⁽⁸⁾。

一方、中国近現代文学研究者の藤井省三は、戦前期の東京外語での中国語教育に注目し、数多くの当事者へのインタビューを行っている。五四以降、東京外語は同時代の中国文学テキストを教科書として扱い、積極的に同時代の中国文学を紹介した。魯迅、巴金などの作家と親交のある人々は、日中戦争の開戦に伴い、通訳として侵略戦争に参加した。そこで、藤井は戦前

日本の中国語教育の背後にあった日中間の交流や侵略の実態を明らかにした⁽⁹⁾。藤井のこのような異文化交流史の視点、または近現代文学研究の視点から中国語教育を考察する方法から本稿は大きな示唆を得た。

戦前の日本での中国語教育に注目したのは、決して言語学者のみならず、中国地域研究の分野にまで及ぶ。中国近現代文学研究者の竹内好（1910-1977）によると、中国語教育が漢文科から独立すべきことと、外国語として教えるべきことは、「純粹の語学者ではなく、支那学者の側から提出されたこと」であったので、竹内は中国語研究者は恥じるべきだと痛烈に批判している⁽¹⁰⁾。本稿では、中国語学者の教育活動以外に、中国文学、または地域・文化研究としての中国学の研究者の活動も視野に入れ、戦前の日本での中国語教育史と文化交流史の視点に立ち、大阪外語が戦前に行っていた中国語教育の実態を考察し、「華語＝同時代の中国」という認識のありかたを究明することを試みる。以上の問題を解明することで、戦前の日本での中国語教育史の軸に、大阪外語の中国語教育を位置付けることが可能となり、また政治権力の中心部であった東京とある程度の距離を置いた中国語教育活動を通じ、日本の周縁部にいた知識人がどのように同時代の中国に関する知識を再構築したのかを窺えるのではないだろうか。ゆえに、本稿は大阪外語中国語部の中国語教育に注目する。

II 近代的教養に相応しくない中国語

外国語が知識の増大と教養の向上の手段であった明治時代とは違い、大正期から昭和初期にかけて、中学校の普通教育での英語教育の存在意義が問われた。昭和元年、「模倣ヲ戒メ創造ヲ励メ」の勅語がくだされてから、英語廃止論は再燃した。その理由について、国文学者の藤村作（1875-1953）は、「模倣の時代は過ぎた」昭和日本の国民は、「外国崇拜の迷夢」から解放されるべきだと語り、莫大な時間と労力を費やし、実用性に乏しい英語科は直ちに中等学校の普通教育から排除されるのが当然だと主張した⁽¹¹⁾。藤村が唱えた英語廃止論に賛成する立場に立つ人も少なくなかったが、この論は大きな反発も招いていた。そこで、外国語教育に対する実用価値と教養価値との区別への言及が行われた。当時、早稲田大学教授の帆足理一郎（1881-1963）は藤村の見解に対し、「従来の教育学者は実用価値と教養価値とを区別し」、「実用価値がないとて必ずしも教養価値がないといふ意味にはならぬ」⁽¹²⁾ので、外国語の教養価値にも注意すべきだと語った。このような英語廃止論ないしは外国語教育に関する論争は、当時から多方面からの注目を集めていた。藤村が英語廃止論を発表した直後、「『現代』（大日本雄弁会出版：筆者注）は「中等学校の英語科を何うするか」と銘うって半年間この問題の特集し」、「『現代』にその見解を寄せた人は一六〇〇余名に上り、さまざまな職業及び階層にわたっていた」⁽¹³⁾。その中には、当時の英語教育に批判的な立場から、英語教育の弊害を改善するために、「わが国と密接な関係があるロシアと支那の国語をも教える」と主張する意見もあった⁽¹⁴⁾。

帆足が反論の中で言及した「教養価値」については、中国語についても問われた。ところが、「教養価値」のある英語とは違い、中国語はさらに複雑な境遇に置かれていた。1937年の盧溝橋事件の後、日中戦争の拡大に伴い、中国語に対する侵略的な需要が高まっていた。そのため、普通教育科で中国語を採用すべきという声が上がっていたのである。ところが、中等学校で中国語を教えることに対しては反発を招いた。たとえば、ジャーナリストの長谷川如是閑（1875-1969）は中国語には教養価値と実用価値が少ないという理由で、普通教育科における中国語の採用に反対している。

事変以来、普通教育における外国語の問題として、一方では以前から一部の間に唱へられてゐた英語廃止論が一層強く主張されるに至り、他方では支那語の採用が主張されてゐる。

支那語は支那、満州に活躍するひとびとには絶対必要だが、わが国民自体の教養としての又は実用としての価値が少なかつたので、今日まで普通教育から除外されてゐたのは寧ろ当然であつた。(中略)

支那語の教育価値は全く実用に局限されてゐるので、特殊の目的をもつものに特別に与えられるべきものだが、これに反して、漢学の普通教育における価値は無論実用の方面もあるが、より以上にわが国民自体の教養の素地としての方面をもつてゐる⁽¹⁵⁾。

1930年代の「教養」の意味は大正期のいわゆる「教養主義」との違いが多少あるが、読書などの努力による人格の向上および自我主体の形成を求める姿勢は共通している⁽¹⁶⁾。長谷川は同記事において、現代中国語に対する教養としての価値の欠如を強調する一方で、中国の古典は「高級の日本的教養の基底をなすべき」であるので、漢学教育は適切だと語っている⁽¹⁷⁾。ここでは、古代中国と現代中国がはっきり区別され、古典中国語を尊重する一方、現代中国語を軽視するという中国認識に対する二重構造が捉えられる。

近代的教養に相応しくないという中国語に対する認識は、当然のことながら、当時の中国語教育に多大な影響を与えた。もちろん、中国語の実用価値への偏重は知識界にとどまらず、一般社会においても共通している。実用価値とは、すなわち現実の需要に応じることである。その需要を一般社会において検証するために、『読売新聞』に掲載された広告を例としてあげたい。『読売新聞』は明治前期からすでに数多くの読者を擁し、統計データによれば、その発行部数は1924年に5万5千台であり、その後は年を追って増加し、1930年はついに20万部を突破している⁽¹⁸⁾。膨大な読者群を擁する『読売新聞』に掲載された広告から、当時の一般社会での需要が窺える。1901年10月、慶應義塾商業学校は中国人講師を招聘し、中国語の会話および時文の講義を開設し、実用性を重視する受講生に向け、募集広告を掲載した⁽¹⁹⁾。1904年2月には、東京日本橋にある清語学堂が速成中国語講座を設け、「三ヶ月で卒業できる」ことを宣伝し、「軍用支那語」の受講生を募集していた⁽²⁰⁾。また、井上翠が編纂した『井上支那語辞典』の宣伝は、中国語、中国文学の研究者を読者として想定する一方、「支那関係の実務家も必備の書籍である」と宣伝し、中国語辞典の実用性を強調している⁽²¹⁾。このように、実用性、そして速成を目的とする中国語に関する広告は『読売新聞』に数多くみられ、一般社会における、中国語に対する「実用的」需要が窺える。また「実用性」には、貿易実務や日常的交流の用途以外にも、侵略戦争のための軍事に用いる中国語も含まれていたことは注目に値する。

実用性を重視した結果、現代中国語教育を開設していた学校は、その実用的需要に応じ、教育現場では主に「時文」を中心に講義を行なっていた。いわゆる「時文」とは、「現時通行文の意、支那時文で行はれてゐる文章を指していふもの」⁽²²⁾であり、「新聞、雑誌、公文、尺牘その他小説、伝説、野史、詩文等を包含するのである」⁽²³⁾。また、時文と古文の区別については、中国語学者の石山福治は以下のように語っている。

偕て然らば、支那の時文とは如何なるものである乎。現今支那に行はるゝ文章は總体の上から之れを大別して古文及び今文の二種に分つたことが出来る。古文とは我等が昔から馴染になつて、現に中等学校以上に必須課目として教へられて居る漢文のことで、今文といふのが即ち茲に説かんとする時文のことである、或は古文を雅文とし今文を俗文と名けても宜か

らう、時文とは日本人が此今体文に下したる名称で、支那で時文といへば前清時代迄行はれた科挙に用ひられた八股文のことを称するものである、科挙や八股文のことに就いては今日既に過去の歴史的範囲に入つた事柄で別段説明する程の必要がないから従つて茲には説かぬが、大括みに之を謂へば、昔から其体を変へぬ文章が所謂漢学即ち今日の支那人のいふ古文で、其時代々々に多少づゝの変遷を来して行く事物を写す日用文が今即ち我等の所謂時文と名くるものであると解しても宜からう(24)。

要するに、教育現場においては、実用語学という考えのもとで、同時代の中国人が書簡、公文書、新聞など公的な場で使っている中国語、つまり時文を教えていた。大阪大学外国学図書館が所蔵する戦前日本での中国語教科書を見ると、数多くの時文教科書が同時代の中国の新聞を取り上げている。例えば、井上翠が編集した『初等支那時文読本』では、「武昌市公安局嚴禁工人露天集會（武昌市公安局は労働者が公の場で集会することを厳しく禁じる）」⁽²⁵⁾という武漢の新聞の文章が用いられている。

ところで、当時の中国語教育現場での教授法は、しばしば漢文の訓読法を採用していた。1877年に創設された東京帝国大学が開学した時から、漢文学科はすでに設置されていたものである。ところが、そこでは「古典中国文学のみが講義され、しかも中国語ではなく漢文訓読法で読まれていた」。藤井省三の考察によれば、当時は中国人講師を雇ったことがあるが、その目的は、実用語教育を行うことであつた。「すべての古典が中国語で読まれるようになったのは、さらに遅れて倉石武四郎が教授として着任した昭和一五年（1940）以降のことである」⁽²⁶⁾。また、一般教育向けの教科書においても同様の傾向がうかがえる。1939年、中国文学者の塩谷温（1878-1962）は中等学校で行つた「時文教育」のため、教授備考を編纂した。そこで、塩谷は「将来は音読に依り、支那語として課するを可とするも、今は便宜上の応用として之を訓読する外はない。従つて本教科書は訓読に便宜な文語体を多く採用してある」⁽²⁷⁾と説明している。塩谷はこの『教授備考』において、教科書に掲げられている文に書き下し文を提示しながら、「語釈」で新出単語にローマ字を用い、中国語による発音を示したうえで意味を説明している。塩谷が示したこのような教授法により、中国語の語順、読み方を改造し、日本語で読めるようになった。この一連のプロセスを経た中国語は、日本語の形音義によって再編されており、結局一種の国語に過ぎなかったといえるであろう。要するに、中国語は外国語として扱われていなかったのである。

III 訓読から同時代音へ

中国語が実用価値に局限され、また漢文の訓読法で教えられることについて、中国語学者・中国文学者の倉石武四郎（1897-1975）は不満を表明していた。1941年、倉石は、京都帝国大学から東京帝国大学に転任した翌年、当時の中国語教育界の様々な問題点とその解決策を取り上げ、『支那語教育の理論と実践』を出版した。そこで彼は、中国語教育における漢学的勢力を直ちに排除すべきだと主張していた。

倉石は同書において、自らの中国語学習経験と教育経験に触れながら、当時の西洋での中国語教育の現状を紹介している。アメリカの大学で中国のことを研究する学生が、まず現代語・現代文学を学び、その後古典を学ぶという順序で進むことに対し、日本だけは「支那の言語や文字を研究するのに、漢文と支那語の様な区別を設けてゐる」⁽²⁸⁾。古典を中心とする「漢文」と同時代の中国を対象とする「支那語」が分けられたことで、互いに領土を定め、縄張りを守

り、「漢文といへば古臭いものと思はれ、支那語といへば実用一点張り定められ」た⁽²⁹⁾。その結果、返り点と送り仮名で中国語を学んでいた学生は、日本語の構造から中国語を理解するため、正確な中国語の文章の構造が習得できず、またその言語の背後にある同時代中国人の生き方、風習などを理解することもできなくなった。倉石はこの点について深い憂慮を示していた。彼は同書の序文で、当時の中国語教育の幼稚さを挙げながら、「国民が支那に関する知識を欠き、その認識を乏しいことが、たゞ今の事態において如何に深刻な結果を生じてゐるか、あるひは将来も生ずる虞に堪へないか、わたくしは、自分がその責任の一部を担当してゐるだけ、国家のため、常に憂慮に堪へないのである」⁽³⁰⁾と嘆き、中国語教育を革新することを呼びかけている。

改革案として、倉石はまず、中等教育における「漢文」の意味を問い直さないといけないと言った。漢文は徳川時代までは確かに国語の一種であつたので、今から抹殺できないものであるが、「さういふ意味の教養を与えるべき学科は、当然、国語の中に編入されるべきものであつて、支那語の研究とは別個の立場をとらねばならない」⁽³¹⁾。そのため、倉石は中学校での漢文科は二つに分解されなければならないとの見解を示し、「徳川時代までに、時勢の必要によつて作られた漢文を取りだして、国語との密接な連絡のもとに、その読法を教授する。その一つは、純然たる外国語として、支那語科に編入する」⁽³²⁾ことを主張した。要するに、既存の漢文科を直ちに改造し、日本旧来の漢文を古典として国語科に入れること、そして、中国語を外国語として、現代語から古典語へ進む順で教授すべきということである。その具体的な教授法としては、表音記号を用い、中国語の発音で中国語を教えることを挙げている。倉石の主張した、漢文の訓読法から同時代音への変更は、中国語を日本語化しようとする欲望から解放するもの、といえるだろう。

倉石武四郎のこの本は世に出た直後から、学術界からの注目を集めていた。1941年5月、中国文学研究会は機関誌の『中国文学』（第73号）に「倉石武四郎著「支那語教育の理論と実際」批判」の特集を編集し、三篇の論説を掲載した。中国哲学研究者の竹内照夫（1910-1982）は倉石の激烈な立場とは異なり、漢文科が古典本位たる現状に即した、漢文の訓読法を支持する一方で、中国語教育における「漢学的・教学的勢力の適当な転換面を設けるべきである」⁽³³⁾と述べた。また、竹内好は、中国研究の分野における絶対的な権威である漢学に気が滅入り、中国語教育における弊害を深く認識している。当時、定職を持たなかった竹内は、現代中国語研究、または現代中国学という学問対象に共感し、漢学は「推せば倒れるし、推さなくても倒れる」ものであり、中国語教育の改革を成功させるカギは、「権力を握ることだけである」⁽³⁴⁾と語った。竹内好は、倉石の改革案は「絶対に敗北することはない」と信じ、「旧派の老人たちの反対があるかもしれない」が、間もなく「倉石さんのエピゴオネンは輩出するだろう」⁽³⁵⁾と倉石を強く支持している。確かに竹内が言った通り、倉石の改革案は、自身が教鞭を執っていた京都帝国大学で行われていた⁽³⁶⁾以外に、倉石と深く繋がりがあつた大阪外語中国語部⁽³⁷⁾でも実施されていた。大阪外語の教員たちは、科学的な方法で中国語を研究することを唱え、教育現場でも同時代音で中国語を教授すること、そして同時代の中国に目を向けることに努めていたのである。

IV 如何に同時代の中国に目を向けるのか

1939年2月、大阪外語中国語部の教員たちは従来の日本での中国語教育の弊害を反省し、一人の教員として、「支那語学再建と全面的支那研究と囚はれざる支那知識の普及への努力の義

務」(38)を果たさなければならぬと記している。このような考えのもとで、大阪外語支那研究会は、雑誌『支那及支那語』を創刊し、「高級な中国語研究雑誌として、また言葉を通じて広く中国文化に触れたいという根本態度」(39)のもとに編集した。彼らは「発刊之辞」において、「使へる支那語とあるがままの支那の追及」が彼らの「態度の端的な表現である」(40)と明言した。

創刊号に掲載された四つの論文のうち、三篇は時文の学習法に触れている。戦前に大阪中央放送局の中国語講座を担当した、大阪外語教授の吉野美弥雄(1893-1962)は、訓読法による中国語を読むのは、「極めて不自然なるものとなり助字、語尾の取扱ひに非常に無理を生じ、動もすれば大意の解釈に止まることになる」とその弊害を指摘したうえで、同時代中国語の発音で中国語を学ぶべきだと語っている(41)。1929年漢文の担当(42)として大阪外語に赴任した山本磯治は、「古文修得者が時文を学ばんとする時の参考として」、いくつかの例文を挙げながら、時文の特徴を説明している。また、山本は時文の読み方は「勿論原則としては支那音ですべき」(43)、同時代音で中国語を学ぶことを論じている。また、同号に掲載された和歌山高等商業学校教授の関忠治の論説は、「時文の訓読法を排除す」を題とし、訓読法とは「外国語たる漢文を国語化せんが為に講ぜられたる方法である」ので、「一旦再表現せられるものは既に一種の国語であつて外国語と見做すことは出来ない」(44)と論じている。その理由について関はさらに以下のように語っている。

換言すれば時文も白話同様「読」「書」「説」三方面の完成を絶対的必要とするのであつて、この三者相互間に何等軽重厚薄の別あるべきではない。故に訓読法により単に「読」一方面のみを重視するが如きは、真の支那語学習者により許容せられざる所であつて、必然之に代る正常なる方法が提唱せられねばならぬ(45)。

関が主張するように、中国語は国語の一種ではなく、外国語として扱わなければならない。その解決策としては、国語化された中国語の音形義を再編し、中国語で「読む」「書く」「話す」という中国人と同じ方法で中国語を学ぶことである。故に、関は「時文に於いても音読法の徹底的励行」を提唱していた。

このような、訓読法を排除し、同時代音で中国語を学ぶということは、決して理論上の提唱だけではなく、教育現場においても積極的に実践されていた。その様子は、戦前的大阪外語中国語部学生が教科書に残した授業ノートから窺える。

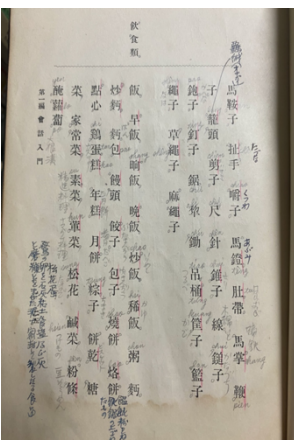


図1 授業ノート(大阪大学外国学図書館蔵)

図1の教科書は大阪外語教授の吉野美弥雄が編纂した『支那語会話教科書』(平野書店、1931)である。新出単語には全てローマ字で中国語の発音が注記されている。日本語で書かれているのは、単語の意味だけである。注目に値するのは、「松花」の左に書かれた受講者によるノートである。そこには、「松花蛋 鷺の卵を石灰、粘土、食塩など灰と磨糠とをまぜた泥で密封して製したる食品」という記述が見られる。つまり、「松花」と関連したものも授業中に紹介されているのである。このノートから、教員たちが中国語を教授する際、同時代音で中国語の発音を説明するだけではなく、その単語と関わる中国の食品の作り方、つまり中国人の日常生活についても触れていたことが推測できるだろう。受講者が単なる言語の学習ではなく、言語を通じて中国の文化、風習に接触していたことは、

1941 年に大阪外語に入学した八木登の回想からも窺える。八木は当時の授業について、「二年生に進級したときだったでしょうか、金子二郎先生が「外語は通訳を養成する学校やないよ。通訳なら半年も勉強すりゃしゃべるくらいにやなる。外語で中国語を勉強するのは、中国語を通じて中国の民衆の心、歴史、文化を知り、理解することや」と教えて下さったその言葉がいまも頭を離れない」(46)と回想している。金子二郎の授業については、のちに大阪外国語大学の学長を務めた伊地智善継(1919-2001)に、より詳しい回想がある。

金子先生が1年に入学したばかりの我々に、中国語学が単に実務語学、戦争語学であってなら
ないことを熱心に解かれたことを思い出す。どの外国語にも実務的側面を持ちまた文化的側
面を持つ。当時の中国語教育で実務的側面が先行し文化的側面が軽視されたことが、先生に
とってがまんならなかったことは、それだけではない。実務的側面をのみ強調していたと思
われる中国語学は、実は明治以来の会話書を暗唱という伝統的方法で教えるという非実務的
なものでもあったことである⁽⁴⁷⁾。

第二節にすでに触れたように、戦前日本での外国語教育に関しては、実用価値と教養価値がはっきり区別されていた。金子二郎はこのような状況に対して、まず、学生が正式に中国語の世界に踏み込む前に、彼らの中国語に対する一般的な認識を再構築し、外国語として中国語を再認識させるように努力していた。その具体的な教授法としては、「中国語教育に中国現代文学を取り入れるということであった」と伊地智は語っている。彼の回想によると、金子は倉石武四郎と同じように、魯迅など中国現代作家の作品を取り上げ、テキストとして授業中で扱っていたことが分かった。その結果、大阪外語生が北京に旅行した時、「大量の現代文学、思想などの本を買ってきて、勝手に読書するという習慣ができ」、当時正式な中国語教育を受けていなかった人が、漢字と漢文訓読によって訳した中国現代文学の翻訳について、「いかに荒唐無稽な部分を含んでいるかいうことが」、大阪外語三年の学生たちでもすぐに判断できたのである⁽⁴⁸⁾。金子の実験的な中国語教育を受けた人々は、当時の日本語訳本を経由せず、原文のまま、かつ積極的に同時代の中国現代文学、思想などに接触し、生々しい中国を見ることができ、同時代の中国を理解する土台が構築されていったと思われる。

また、学生たちは授業中だけではなく、中国への修学旅行を通じ、自分の目から同時代の中国を見ることもできた。修学旅行の様子については、大阪外国語大学・大阪大学外国語部同窓会の咲耶会所蔵「昭和8年度 中華及満州修学旅行」アルバムからうかがえる。

[illegible]

図2 昭和8年度 中華及滿州修学旅行日程

図2の日程表が示すように、修学旅行に参加した大阪外語中国語部の学生は、1933年7月19日に神戸から出発し、日本郵船会社の長崎号に乗って、21日に上海に到着した。そして、杭州、



図3 昭和8年度中華及満州修学旅行アルバム
(咲耶会蔵)

蘇州、南京、済南、天津、北平（北京）、大連、奉天（瀋陽）、新京（長春）を遍歴し、自分の目から同時代の中国を見た。学生たちはもっぱら天安門などのいわゆる中国の代表的な観光名所を撮るのではなく、宿泊先と町に歩いている中国人の日常生活を撮っている（図3）。さらに、彼らはそれらの写真にいくつかの簡単な説明を付けている（図4）。そこから、当時の大阪外語の学生の中国を見る視線が見て取れる。アルバムには、列車に貼られた「中国人不打中国人（中国人は中国人と戦

わない）」の標語（図5）、北京の東安市場でチャイナドレスを着ている中国人女性の姿（図6）、などが数多くみられる。これらの写真からは、近代化した日本の中国へのオリエンタリズム的な視線が捉えられる一方で、中国人の日常生活への関心も見える。そういった関心を喚起したきっかけとして、学生が大阪外語の教育現場で得た中国に関する知識があったであろうことは容易に想像できよう。教室で同時代音によって中国語を学ぶことで、同時代の中国に関する知識をある程度習得してから、自らの目を通して、同時代の中国を理解しようとする土台を構築していたのである。ちなみに、学生が残した旅のノートからは、彼らが1930年代に中国に行ったところ、ちょうど反日感情が中国国内で高揚している最中であつたので、中国に滞在している間、警察も同行していたことが分かる。



図4 昭和8年度中華及満州修学旅行アルバム（咲耶会蔵）

V 『支那及支那語』

1972年、大阪外語開学50周年の際、伊地智善継は当時の附属施設だった大陸語学研究所のことに触れながら、語学研究の重要性を語っている。

『日支事変』は昭和十三年にはじまっていたが、日本の対中国侵略は研究所発足当時すでに泥沼化の状態にあった。当時良識を持つ人々の間



図5 昭和8年度中華及満州修学旅行アルバム
(咲耶会蔵)

で、中国語研究、教育の科学化と、中国文化の再認識が唱えられていた。（もちろん、かなり多くの中国語研究者は、『支那事変』に便乗して、全く無反省に中国語教育に当っており、またその研究態度も必ずしも科学的ではなかった。）我々は一方、五四の反封建反帝国主義運動以来の近代中国の歴史の歩みについて全く共感しつつ、しかも一方では、『日支事変』は日中の理解の不足に原因している云々といった観念的認識に終始していたようである。日中間の戦争の本質についての論理的動力をなしえなかったことは、いうまでもない(49)。



図6 昭和8年度中華及滿州修学旅行アルバム（咲耶会蔵）

下線部が示したように、伊地智が言った中国語研究、教育の科学化ということは、中国を再認識することと繋がっている。大阪外語教員たちが編集した『支那及支那語』は、これを最もよく反映したものであったといえよう。

前述のように、『支那及支那語』は1939年に、大阪外語支那研究会が創刊したものであったが、のちに大陸語学研究所がその編集作業を引き受けた。1943年8月、戦時中の資源統制令によって一時停刊され、のちに同年10月に『支那語文化』と改題して再刊するが、これは2号で停刊した⁽⁵⁰⁾。創刊当時の編集長小田信秀は、「本誌はその名にも明らかなる如く純然たる支那語研究雑誌乃至支那語月刊講座ではなく又語学を離れた支那研究雑誌乃至評論雑誌でもない中間的研究雑誌である」と位置付け、「支那語そのものに基礎を置くものである以上本誌が支那語を骨子とし、一般支那

事情の研究は支那語を通じてなされる方面に重点を置く事は申すまでもない」⁽⁵¹⁾と述べた。要するに、中国語を通じて、そのままの同時代の中国に接触するということであろう。

この雑誌は、いくつかの顕著な特徴がある。まず、科学的な方法で中国語を研究するために、積極的に中国、西洋世界の語学研究成果を翻訳し、日本に紹介している点である。現代中国語の文法学の草創期ともいえる1920年代に、北京師範大学の中国語学者黎錦熙（1890-1978）は『新著国語文法』（商務印書館、1924）を出版し、中国語学界に大きな影響を与えた。伊地智善継は、この本の出版によって「中国語文法は伝統的訓詁学からヨーロッパ文法学へ解放され、かりにも英語を通じて文法学への理解がある程度可能であった我々は、中国語学習に文法学的アプローチができるようになった」⁽⁵²⁾と高く評価している。この本の日本の中国語研究、中国語教育に対する重要性を感じた金子二郎は、黎錦熙に手紙を送り、黎氏の著作を翻訳したいという意欲を伝えた。当時、すでに日本占領下の北京を離れていた黎は、金子に宛てた手紙で、「戦争はいつまでも継続しうるものでなく、何年か後に再び書信を交換することができるであろう。それまで、自分の著作を翻訳して、日本の教育で利用してください」と返信し、『新著国語文法』と『比較文法』（著者書店、1933年）を送った⁽⁵³⁾。その後、まず、小田信秀による抄訳と紹介文を『支那及支那語』に発表し、伊地智など当時の学生で上級生だったものは、金子二郎の指導下、黎の『新著国語文法』を訳し、1943年に『黎氏支那語文法』と題して出版した⁽⁵⁴⁾。その40余年後、1985年、伊地智が中国を訪れた際、ようやくこの訳本を黎錦熙の娘の黎澤渝に寄贈した。この黎の本の日本語訳をめぐるのは、戦時中から戦後に引き継がれた日中知識人の学術交流を示す貴重な一側面も窺える。黎錦熙の著作以外にも、中国語学者の王力（1900-1986）が書いた『中国語文概論』（商務印書館、1939）が『支那語学概論』として訳出され、『支那及支那語』（第二巻第一号から第二巻第十一号まで）に連載されている。また、胡適（1891-1962）、趙元任（1892-1982）などの著名学者の論考もやはり翻訳され、『支那及支那語』に掲載された。

『支那及支那語』の特徴の第二として、大阪外語の教員たちの研究成果を積極的に発表した点が挙げられる。前述したように、大阪外語の教員たちは教育現場において同時代音を教え、同時代の中国事情を紹介するなど実験的・進歩的な授業法を試みたが、その「実験」を支えたのは、間違いなく彼らの中国語研究である。雑誌には、吉野美彌雄が行った「中国語の重念の

研究」、「同字異義の研究」、岡田博が行った「中国語の子音及連音の研究」、金子二郎の「中国語の口語文法」研究などが数多く見られる。

第三に、同時代の中国事情を紹介した点である。言語学研究以外にも、中国事情に関する論説、紹介文も数多く掲載されている。特に注目すべきは、隅田直則が第一巻第十号から連載した「随見随録」というコラムである。隅田は毎回、中国滞在時に耳にした生の中国語を記し、その単語にいくつかの説明を加えて、雑誌に寄稿している。例えば、「洗三」という言葉について、隅田は「子供が生まれて三日目親戚を招きて祝事をするものである」⁽⁵⁵⁾と説明し、この言葉を用いた中国語の例文を付けている。また、金子二郎などは、雑誌に「大陸事情」というコラムを開設し、毎回一般読者に中国に関する知識をわかりやすく説明していた。このような、普通の教科書には収録されておらず、かつ同時代の中国で実際に使われている言葉の紹介を通じて、その背後にある中国の状況や風習に接触させることで、日本の学生を中心とした読者に同時代の中国を理解する機会を与えていたのである。

最後に、中国現代文学を紹介していた点を挙げたい。すでに触れたように、金子二郎は中国語の授業において、積極的に中国現代文学をテキストとして授業中に使用していた。それ以外にも、大阪外語の教員たちは雑誌でも積極的に同時代の中国文学を紹介している。そこでは、謝冰瑩(1906-2000)、田漢(1898-1968)、郭沫若(1892-1978)、謝冰心(1900-1999)、盧焚(1910-1988)、廃名(1901-1967)など中国現代作家の小説が抄訳されている。この雑誌の大きな特徴として、中国語の原文を提示したうえで、日本語訳を併記していることを強調しておきたい。すなわち、「対読」という方式が採用されているのである。読者は「対読」の読書方式を通じ、文字通り中国語原文と日本語の間を絶えず行き来しながら対照的に同時代の中国小説を味わうことができたであろう。そして小説を読みながら、日本語と中国語との対訳能力を向上させることができたと考えられる。また、『支那及支那語』が取り上げた小説は中国語の小説のみならず、林芙美子(1903-1951)や芥川龍之介(1892-1927)などの日本語小説も中国語に訳し、「対読」方式で掲載している。

一方、東京外国語学校は『支那語』という中国語学習誌を編集していた。『支那及支那語』とは異なり、『支那語』は学習者がこの雑誌を用い、自学自習で中国語を勉強することに重点が置かれ、いくつかの学習法を紹介したうえで、中国語試験の問題を解かせ、読者の中国語訳文を添削することを行っていた。それに対し、本節で考察したように、『支那及支那語』は語学の研究および同時代中国の文化を紹介することを目指していた。さらに、『支那及支那語』では、中国に滞在している教員や学生が中国の現状を記録し、雑誌に寄稿した。また雑誌も積極的に読者が寄せた論説への感想、コメントを掲載し、読者が交流できる場を提供した。ここでは、語学研究と語学教育の相互関係が構築されていたと言える。

VI おわりに

ここで、本稿の冒頭で引用した井上翠の文章に戻りたい。戦前の日本での教育・研究における中国語は、伝統的な訓読法によって、本来の統語システムを無視し、日本語の形音義によって再編され、結局一種の日本語になってしまっていた。それにより、現代中国語そのものは当然のことながら、それを用いる同時代中国人の日常生活や思想なども、やはり中国語が日本語化されるプロセスのなかで、見えにくいものにされていたのではないだろうか。このような国語化の結果、日本人は中国語を国語の枠組みの中で曲がりなりにもある程度は読解できるので、主体的に勉強する、またはその言語を支える文化などの要素を理解する必要に気づくことは稀

であった。そのため、近代的教養にふさわしくないとされた中国語は、もっぱら軍事や貿易などの実用的価値に限定され、さらに訓読法によって教授されることで、同時代の中国を理解する可能性さえも失わされてしまった。井上が「華語」への軽視として嘆いているのは、そのような状態が行き着くところに同時代中国に対する軽視や、侵略戦争とその結果としての敗戦があった、ということであろう。

しかし、その中でも中国語教育に対する問い直しを試みた人々があつた。本稿が考察したように、井上翠、吉野美弥雄、金子二郎などの教員は、大阪外語の教育現場で訓読法を排除し、同時代音で中国語を教授すると同時に、積極的に同時代の中国文学を紹介した。また、中国語を通じ、同時代の中国を理解するという目的で発刊した『支那及支那語』は、大阪外語の教員と学生に教場以外の交流の場を提供した。このような語学研究と語学教育の相互関係のなかで、学生は一般社会での中国に対する認識の枠を離れ、自分の目から同時代の中国を見ることが可能となったであろうと思われる。

今、なぜ戦前的大阪外語の中国語教育を研究対象として扱う意味があるのか。戦時中の大阪外語の教員は、中国語教授法を革新し、同時代音で中国語を読むこと、そして現代文学や中国現地の生の言葉を紹介することで、同時代の中国に目を向けるように努力をすることで、当時の日本社会が同時代の中国に対する興味を喪失してしまった状況に立ち向かっていた。

現在の日中両国は、相互文化理解への興味をなくしつつあるように見える。中国語がわからないまま中国の事情を訳知り顔に議論すること、または日本語がわからないまま日本の事情に口出しすることは、今でもごく普通にみられる状況である。人々が自分の目ではなく、メディアに頼り切ったままでは、両国の本来の様子が見えなくなるのも無理はないだろう。本稿がその一端を発掘・紹介した 1930 年代から 1940 年代にかけて、大阪外語中国語部が行った中国語教育、中国語研究の革新の意味は、改めて見直されてもよいと思われる。

付記：本稿の作成にあたり、今泉秀人先生、深尾葉子先生、大阪外国語大学・大阪大学外国語学部同窓会・咲耶会から貴重な資料を提供していただいた。また、査読者の方々に細部にわたって貴重な教示を頂いた。この場を借りて、深謝の意を表す。なお、本論文は科研費 21J11831 の助成をうけたものである。

注

- (1) 井上翠 1950『松涛自述』大阪外国語大学中国研究会、25-26 頁。なお、本稿は可能な限り「支那」を「中国」と改めたが、参考文献はそのまま引用する。また、本稿で扱う「華語」「支那語」「中国語」という語はすべて現代中国語を指す。
- (2) 六角恒広 1961『近代日本の中国語教育』淡路書房、9 頁。
- (3) 井上翠 1946「鵬翼に題す」『鵬翼』復巻 1 号、序文。
- (4) 「編輯後記」1946『鵬翼』復巻 1 号。
- (5) 六角恒広 1961『近代日本の中国語教育』淡路書房、及び六角恒広 1988『中国語教育史の研究』東方書店。また、近代日本での中国語教育の先駆者である安藤彦太郎 1988『中国語と近代日本』岩波書店など研究も挙げられる。
- (6) 大阪外国語大学 70 年史編集委員会 1992『大阪外国語大学 70 年史』大阪外国語大学 70 年史刊行会。
- (7) 邵艶 2004「戦前日本の高等教育機関における中国語教育に関する研究：大阪外国語学校と天理外国語学校を中心に」『神戸大学発達科学部研究紀要』12 (1)、189-214 頁。
- (8) 藤田佳久 2012『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』中日新聞社；Paul Sinclair/Dongyan Blachford 2020 “The Kago Suihen Textbook Series and Japan’s Business Language Education

- in *Early Twentieth-Century Shanghai*,” *Teaching in International Business*, Volume 31, pp.238-258.
- (9) 藤井省三 1992 『東京外語支那語部：交流と侵略のはざままで』朝日新聞社。
- (10) 竹内好 1941 「支那学の世界」『中国文学』第73号、112頁。
- (11) 藤村作 1927 「英語科廃止の急務」『現代』5月号。参照は川澄哲夫(編)1978『英語教育論争史資料日本英学史』大修館書店、251-262頁。
- (12) 帆足理一郎 1927 「廃止には反対である」『現代』7月号。引用は川澄哲夫(編)1978『英語教育論争史資料日本英学史』大修館書店、275頁。
- (13) 川澄哲夫(編)1978『英語教育論争史資料日本英学史』大修館書店、231-248頁。
- (14) 川澄哲夫(編)1978『英語教育論争史資料日本英学史』大修館書店、234-235頁。
- (15) 長谷川如是閑 1938 「支那語・漢学・英語」『読売新聞』1938年3月4日。
- (16) 詳しくは渡辺かよ子 1997『近現代日本の教養論：1930年代を中心に』修明社を参照する。
- (17) 長谷川如是閑 1938 「支那語・漢学・英語」『読売新聞』1938年3月4日。
- (18) 岡野敏成(編)1955『読売新聞八十年史』読売新聞社、298頁。
- (19) 『読売新聞』、1901年10月31日。
- (20) 『読売新聞』、1904年2月29日。
- (21) 『読売新聞』、1928年10月12日。
- (22) 塩谷温 1939『中等学校 支那時文読本 教授備考』開隆堂、1頁。
- (23) 吉野美彌雄 1939 「支那時文の研究に就て」『支那及支那語』創刊号、2頁。
- (24) 石山福治 1920『支那時文講義』文求堂書店、2-3頁。
- (25) 井上翠 1935『初等支那時文読本』同文社、2頁。
- (26) 藤井省三 1992『東京外語支那語部：交流と侵略のはざままで』朝日新聞社、27-28頁。
- (27) 塩谷温 1939『中等学校 支那時文読本 教授備考』開隆堂、1頁。
- (28) 倉石武四郎 1941『支那語教育の理論と実践』岩波書店、88-89頁。
- (29) 倉石武四郎 1941『支那語教育の理論と実践』岩波書店、2頁。
- (30) 倉石武四郎 1941『支那語教育の理論と実践』岩波書店、1頁。
- (31) 倉石武四郎 1941『支那語教育の理論と実践』岩波書店、90頁。
- (32) 倉石武四郎 1941『支那語教育の理論と実践』岩波書店、96頁。
- (33) 竹内照夫 1941 「漢文・支那語教育と支那学の現実——倉石主義の感想」『中国文学』第73号、111頁。
- (34) 竹内好 1941 「支那学の世界」『中国文学』第73号、112頁。
- (35) 竹内好 1941 「支那学の世界」『中国文学』第73号、113頁。
- (36) 『支那語教育の理論と実践』によれば、倉石が1930年中国の在外研究から京都帝国大学に帰任した後、授業で訓読法を外し、中国語の発音記号と国音字典の使用法を説明したうえで、魯迅の小説を教科書として授業を行っていた。試験問題は発音ルールを重視し、魯迅の小説の任意の場所から出題し、その問題の中のすべての文字に、四声ならびに有気無気の記号を施さしめた。(191-193頁)
- (37) 『大阪外国語大学70年史』によれば、井上翠の後任である金子二郎は1936年に教授として大阪外語に赴任した。金子は大阪外語で教鞭を執りつつ、倉石武四郎の協力を得て、中国語学科の展開に新しい方向を示した。『支那及支那語』の発刊、そして1941年の大陸語学研究所の創設は、金子二郎と倉石武四郎の「合作」により実現したものである。(246-247頁)
- (38) 編集部 1939 「我等の主張 発刊之辞——謹んで陣歿戦士の英霊に黙祷を捧ぐ」『支那及支那語』創刊号、1頁。
- (39) 大阪外国語大学70年史編集委員会(編)1992『大阪外国語大学70年史』大阪外国語大学70年史刊行会、254頁。
- (40) 編集部 1939 「我等の主張 発刊之辞——謹んで陣歿戦士の英霊に黙祷を捧ぐ」『支那及支那語』創刊号、1頁。
- (41) 吉野美弥雄 1939 「支那時文の研究に就て」『支那及支那語』創刊号、3頁。

- (42) 大阪外国語大学 70 年史編集委員会(編) 1992『大阪外国語大学 70 年史』大阪外国語大学 70 年史刊行会、245 頁。
- (43) 山本磯治 1939「古文より見たる時文の特徴」『支那及支那語』創刊号、10 頁。
- (44) 関忠治 1939「時文の訓読法を排す」『支那及支那語』創刊号、12 頁。
- (45) 関忠治 1939「時文の訓読法を排す」『支那及支那語』創刊号、13 頁。
- (46) 大阪外国語大学同窓会(編) 1989『大阪外国語大学 70 史・資料集』大阪外国語大学同窓会、138 頁。
- (47) 伊地智善継 1986「金子先生、そして黎錦熙先生」『咲耶』第 7 号、103 頁。
- (48) 伊地智善継 1986「金子先生、そして黎錦熙先生」『咲耶』第 7 号、103 頁。
- (49) 伊地智善継 1972「大阪外国語学校 大陸語学研究所記」『きんきら 50 年 大阪外国語大学 同窓会 50 周年記念誌』大阪外国語大学同窓会、第 67 頁。
- (50) 大阪外国語大学同窓会(編) 1989『大阪外国語大学 70 史・資料集』大阪外国語大学同窓会、254 頁。
- (51) 小田信秀 1939「編集後記」『支那及支那語』創刊号、48 頁。
- (52) 伊地智善継 1986「金子先生、そして黎錦熙先生」『咲耶』第 7 号、104 頁。
- (53) 伊地智善継 1986「金子先生、そして黎錦熙先生」、『咲耶』第 7 号、104 頁。
- (54) 黎錦熙 1943(1924)、『黎氏支那語文法』(黎錦熙、『新著国語文法』、大阪外国語学校大陸語研究所訳)甲文堂書店。
- (55) 隅田直則 1939「隨見隨錄」『支那及支那語』第一卷第十号、32 頁。

引用・参考文献

和文文献

- 井上翠 1935『初等支那時文読本』同文社。
- 大阪外国語大学 70 年史編集委員会 1992『大阪外国語大学 70 年史』大阪外国語大学 70 年史刊行会。
- 大阪外国語大学同窓会(編) 1989『大阪外国語大学 70 史・資料集』大阪外国語大学同窓会。
- 川澄哲夫(編) 1978『英語教育論争史 資料日本英学史』大修館書店。
- 倉石武四郎 1941『支那語教育の理論と実践』岩波書店。
- 塩谷温 1939『中等学校 支那時文読本 教授備考』開隆堂。
- 邵艶 2004「戦前日本の高等教育機関における中国語教育に関する研究——大阪外国語学校と天理外国語学校を中心に」『神戸大学発達科学部研究紀要』12 (1)、189-214 頁。
- 関忠治 1939「時文の訓読法を排す」『支那及支那語』創刊号、12-14 頁。
- 藤井省三 1992『東京外語支那語部——交流と侵略のはざままで』朝日新聞社。
- 藤田佳久 2012『日中に懸ける——東亜同文書院の群像』中日新聞社。
- 山本磯治 1939「古文より見たる時文の特徴」『支那及支那語』創刊号、4-11 頁。
- 吉野美弥雄 1939「支那時文の研究に就て」『支那及支那語』創刊号、2-3 頁。
- 六角恒広 1961『近代日本の中国語教育』淡路書房。
- 渡辺かよ子 1997『近現代日本の教養論——1930 年代を中心に』修明社。

欧文文献

- Sinclair, Paul and Dongyan Blachford, 2020 “The Kago Suihen Textbook Series and Japan’s Business Language Education in Early Twentieth-Century Shanghai,” *Teaching in International Business*, 31: 238-258.